

エンゲルス生誕二〇〇年によせて

島崎 隆

それでは[労働者諸君]、これまで歩いてきた道を進め。なお多くのことが君たちの眼前に差し迫っている。毅然とせよ、くじけてはならない。—君たちの成功は確実である。君たちが歩まねばならない道程の一步一步は、われわれと共同の責務に、人類の責務に役立つことになるであろう。(エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』)

一八二〇年に生まれたエンゲルスにとって、二〇二〇年は生誕二〇〇年である。マルクス主義と社会主義の形成・発展にとって、マルクスとともにエンゲルスは実に偉大な貢献をなしたことはいうまでもない。その思想は、マルクス・エンゲルス主義ともいわれるべきであろう。最近放映された映画『マルクス・エンゲルス』は原題が The Young Karl Marx というものであり、マルクス生誕二〇〇年記念の作品だったが、そこでもエンゲルスは主人公と並ぶ偉大な存在として描かれていた。エンゲルスは紡績工場の経営者の息子として生まれ、資本家である父との葛藤に苦しみつつ、革命運動へと身を投じていった。マルクス自身の経済的生活も、さらに現存の『資本論』第二巻、三巻の完成も、実にエンゲルスの援助がなければ不可能であった。幸いというべきか、エンゲルスは父親が共同経営するマンチェスターで働くこととなり、そこで困窮するマルクス一家に金銭的援助をすることができたのである。

若きエンゲルスは、マルクスに先んじて『国民経済学批判大綱』（一八四三年末頃）などの経済学的著作を刊行し、資本主義社会を批判した。また『イギリスにおける労働者階級の状態』（一八四五年出版）は、エンゲルスがプロレタリアートの人びとと、生活条件や彼らの苦しみ・喜びについて語り合い、必要かつ確実な文献を利用して作成したものである。さらにマルクスと共同で、彼は『聖家族』『ドイツ・イデオロギー』『共産党宣言』などの一連の著作を残した。さらに哲学の分野でも、『反デューリング論』『フォイエルバッハ論』などの啓蒙的著作によって、広く弁証法的かつ唯物論的な哲学・経済学を展開した。『空想から科学への社会主義の発展』を含め、これらの著作によって、マルクス主義の思想を学んだ読者は多い。さらに『家族・私有財産・国家の起源』は、フェミニズム、人類学、社会学などに通ずる、広範な視野をもった著作であった。

一八六四年エンゲルスは、第一インターナショナル(国際労働者協会)をマルクスとともにロンドンで結成した(一八七六年解散)。これは世界最初の労働者階級の国際的組織であり、彼らは科学的社会主義の立場から労働運動や政治的闘争を指導した。そしてマルクス亡きあと、エンゲルスはヨーロッパの社会主義運動、労働運動の指導者的立場に立つて活

動し、一八九五年に喉頭ガン（食道ガン？）のため七四歳でその生涯を閉じた。

ところで、エンゲルスは『自然弁証法』という遺稿も残したが、これも重要なものである。これは、新メガに依拠して (MEGAI/26)、あらたに秋間実・渋谷一夫訳『自然の弁証法』（新日本出版社、一九九九年）として刊行されている。この遺稿については、佐々木力氏によれば、最初に公刊した旧ソ連のリャザノフがアインシュタインにその評価を聞いたそうである。アインシュタインは、この遺稿が現代の物理諸科学については時代後れになってしまったが、思想家としてのエンゲルスの重要性に鑑み、出版すべきであろうと述べたという*。もちろんアインシュタインの提唱した相対性理論、さらに量子力学などの科学的成果はエンゲルス以後のものだから、古くなっているのは当たり前である。本当はレーニンが、エンゲルスに倣って『唯物論と経験批判論』などで、当時の最先端の現代科学を総括すべきだっただろう。とはいえ、分析哲学系の現代の科学哲学者のヒラリー・パットナムは、エンゲルスについて、当時としてはもっとも多くの自然科学の知識をもっていた知識人の一人であり、自分とは立場が異なるとはいえ、『自然弁証法』が「科学の哲学に関する偉大な著作である」と高く評価しているのである**。

* 佐々木力「永続革命論から環境社会主義のプログラムへ」、『未来』春号、未來社、二〇二〇年、三六頁以下参照。

** ブライアン・マギー編『哲学の現在』（磯野友彦監訳）河出書房新社、一九八三年、二七五頁参照。

エンゲルスの取り組んだ探究の分野は、大きくいって五つに区分されると思われる。第一は、哲学的世界観やマルクス主義哲学の基本性格に関する考察である。彼はわかりやすくマルクス主義とは何かを定式化して人口に膾炙した。マルクスとの共著『ドイツ・イデオロギー』における唯物史観の形成は実に大きな功績であり、そして、その後期での著作『フォイエルバッハ論』などにおける「哲学の根本問題」をめぐる唯物論と観念論の対立についての考察などは、わかりやすい特徴づけではある。だが、こうした抽象的世界観は、かえって『ドイツ・イデオロギー』などにおける理解（唯物史観を中心とした立場）とはかならずしも統一されていないといえよう。西欧マルクス主義などから批判される由縁である。第二は、弁証法・論理学・認識論に関する考察である。ここでエンゲルスは『反デュリング論』『自然弁証法』などで、ヘーゲルを批判的に摂取して、豊かな業績を残した。それはたとえば、主観的弁証法と客観的弁証法の関係、真理論、弁証法的認識と実践の関係、弁証法の三法則とカテゴリー論、形式論理学と弁証法の関係、「形而上学」への批判、古代ギリシャ以来の哲学史、などの問題について実に豊かな成果を残した。とはい

え、「弁証法的唯物論」（＝マルクス主義哲学）とは何かという第一の基本問題が、第二の問題である「唯物論的弁証法」の問題へと混同されてしまうなど、第二の方法論的問題がマルクス主義哲学の基本問題の中心になるという偏向が、それ以後のマルクス・レーニン主義のなかで明示されていった。

第三はさきほど述べた、自然弁証法ないし弁証法的自然観の探究の問題である。のちほど述べるが、この分野の考察は、現代の環境問題などに関わらせると、実に示唆的なものとなっている。エンゲルスは、一八世紀までの機械論的で固定した自然のあり方を前提する自然観（ニュートン力学的世界観など）を、当時勃興してきた、多様な自然科学の成果を吸収して、弁証法的で唯物論的な自然観へと転換したのである。当時の混沌とした自然科学の成果のなかから「三大発見」（エネルギーの転化の法則、動物・植物の細胞説、地質学的・生物学的な進化論）を洞察して、自然物質の相互転化、運動と歴史的発展性というダイナミックな弁証法的自然観を打ち立てたといえよう。もっともこの自然観も、社会の発展のなかで実践的立場から意図的に位置づけられなければ、独断論的になってしまう。環境問題を解決するようなエコロジー的自然観といえ、それは自然現象を機械のような仕組みと見る機械論的な自然観ではありえないし、とはいえ、神秘的で宗教的なロマン主義的自然観も、非科学的で多くの人を説得するものとはいえない。その点で、自然科学の成果にしっかりもとづき、しかも自然全体を有機的構造をもち、宇宙から生命まで進化論的過程にあると見る弁証法的自然観は、もっとも自然環境を正しく、豊かにとらえるものといえるだろう。第四は、近代資本主義の経済学的認識を中心とする考察である。この点では、まず初期の『国民経済学批判大綱』などの著作がある。また『反デューリング論』の第二編、第三編などで、資本主義経済の矛盾をわかりやすく展開している点は有益である。エンゲルスは経済学が本質上、ひとつの歴史科学であり、アダム・スミスらが扱った経済学は永遠ではなく、有限な「狭義の経済学」にすぎず、多様な人間社会における生産・交換・分配を考察する「広義の経済学」がさらに想定されなければならないと考えた。こうした考察は注目されるべきである。第五は、革命論を含め、史的唯物論に関わる社会的・歴史的課題群である。マルクスとの共著『ドイツ・イデオロギー』を除けば、『家族・私有財産・国家の起源』において、人類史を野蛮・未開・文明に区分して、そのなかで氏族、家族、婚姻、所有、国家、権力などを扱い、史的唯物論をさらに豊かに前進させた。このなかで、エンゲルスは資本主義的搾取と家父長制的な女性抑圧のリアルな関係を探り、マルクス主義フェミニズムの基礎を築いたといえよう。こうして、ブルジョア社会の婚姻制度は、姦淫と売春によって補完されている、と厳しく指摘される。歴史における二種類の生産（生活資料の生産と種の繁殖）という指摘も、史的唯物論の原理問題と関わって大き

な論争をのちに引き起こした。この分野でのエンゲルスの功績が十分に確認されてよいと思われる。

以上でもある程度述べたように、第三の自然弁証法の問題は、自然環境問題またはエコロジーと関わって、現代的に再評価されることができる。実は従来のマルクス・レーニン主義哲学では、エンゲルスの自然弁証法は、その哲学の基礎として体系的に唯物論的役割を果たしていたにすぎなかった。自然弁証法を承認できなければ、観念論でしかないというわけである。だがいまでは、まさに自然弁証法(弁証法的自然観)こそ、自然環境問題を考察するのにふさわしい自然観なのだとされてきている。さらにそれは、単なる人間の外部の自然の問題であるというのではなく、エンゲルスは、遺稿の中の草稿「サルがヒトになることに労働はどう関与したのか」などでは、生物学的進化論の問題と初期の人類史の問題をともにつなげて扱っている。すなわち、サルの生物学的進化の問題が史的唯物論における人類の初発的発展の問題と連続的に考察されている。エンゲルスはここで、サルのような動物的状态から人間的な状態への進化の状況を、労働を中心的原動力として、直立歩行、手の使用、言語の発達、肉食の習慣、火の使用などの現象とともに扱っているのである。

そしてそこで、人類は生産力の発展にともなって、自然を制御し支配する技術を覚えるが、エンゲルスは、自然支配によって自然に勝利することが、その勝利にうぬぼれると、人類はかえって自然に「復讐」されると警告を発している。その一例として、エンゲルスはかつてのメソポタミア、ギリシャ、小アジアなどの歴史で、耕地を獲得するための森林伐採などの自然破壊によって、人間が住めなくなったことを挙げている。現代でいえば、石炭や石油という便利な燃料の利用が、結果として地球温暖化という危機的状況を招いているなどということも、自然の「復讐」といえないこともない。さらに興味深いことにエンゲルスは、『反デューリング論』第三編「社会主義」において、資本主義的な近代工業の発展にともなう都市と農村の分裂・分離のなかで、空気、水、さらに土地の汚染が発生することを指摘する。そのさい、やせ衰えていく都市住民地域の糞尿を利用することによって、病気を生む代わりに植物を生むだろうと予測している。ここに都市と農村の融合状態があるというのである。これはまさに、肥料として糞尿を利用するという、過去の日本でやっていた下肥のことではないだろうか。いずれにせよ、エンゲルスがこうした構想に、エコロジー的観点から興味をもっていたとは、興味深いことではないだろうか。

くり返しになるが、エンゲルスの存在がなければ、マルクスの『資本論』は完成されえ

ず、マルクス一家は経済的におおいに困窮しただろう。のちのマルクス・レーニン主義の不十分性につながるような考え方もあったが、彼によって初めて、マルクス主義の哲学、つまり弁証法的唯物論が一般的な形で定式化されて広まり、マルクス主義の社会的・歴史的認識が多様に展開され、浸透したといえるだろう。レーニンもある意味、マルクス主義哲学を構想するさいに、かなりエンゲルスの見解を踏襲したといえる*。

* エンゲルス哲学の全体像や問題点については、拙著『ポスト・マルクス主義の思想と方法』こうち書房、一九九七年所収の、第一章第三節「エンゲルスとレーニンの評価をめぐって」、第九章「エンゲルス研究における論争と到達点」、第一〇章「エンゲルスにおける唯物論・弁証法・自由論」をさらに参照。拙著『エコマルクス主義』知泉書館、二〇〇七年所収の補論2「『自然弁証法』の《環境論的転回》」も参照のこと。